# 座頭の木

秋田県

座頭というのは、琵琶や三味線などをひいて、歌や物語を聞かせながら旅をして回るお坊さんのことです。

むかし、あったずもな

むかし、あるところに、渡し守がいました。渡し守は、川を船で渡すのが仕事です。

ある年のことです。雨がたくさん降って、川があふれて家や畑が流されました。ようやく水が引いたあと、渡し守は、船を出そうと、川岸に流れ着いているたくさんの木を拾い集めていました。すると、向こうのほうから、なにかうす黒いものが流れて来ました。渡し守は、

「おや、いい木が流れてきたぞ」と思って、ひきあげようとしました。すると、それは木ではなくて、死んだ人間でした。

「なんと。かわいそうなことだ」

よく見ると、それは旅の座頭でした。渡し守は、死んだ座頭を背負って帰り、畑の中に埋めてやりました。

二、三日たつと、座頭を埋めた所に小さな芽が出ました。芽は、だんだん育って、木になりました。それは、だれも見たことのない木でした。木はどんどん大きくなりましたが、やっぱりだれも名前を知りませんでした。渡し守は、

「座頭を埋めたら木になったぞ」といって村じゅう歩きました。すると、たいした評判になって、村の人がたくさん見にやって来ました。

やがて、木の枝につぼみがたくさんつきました。つぼみは、大きくなって、赤や、むらさき、黄色、白の、一尺も三尺もある大きな花がさきました。すると、あっちの町からも、こっちの村からも、たくさんの人が見物にやって来ました。渡し守はその見物料で、たいしたお金持ちになりました。

渡し守は、それぞれの花のまんなかに小さい座頭がひとりずつすわっているのに気がつきました。太鼓をたたいている者や、三味線をひいている者、鐘をたたいている者、歌を歌っている者、笛を吹いている者。いろんなかっこうの座頭がいます。なんとめずらしいということで、また評判になって、五十里も六十里も遠くから見物人がやって来ました。

そのうち、風がふいて、花が川の中に落ちると、花の中の座頭たちは、太鼓をたたく、三味線をひく、鐘をたたく、歌を歌う、笛をふく。ドンチャン、ドンチャン、ドンチャンと、にぎやかに川を流れていきました。渡し守は、またまた、見物料で大もうけしました。

やがて、花がぜんぶ散りました。すると、花のあったところに、子どものほしいようなものがいっぱいぶらさがりました。赤い着物や赤い下駄、赤い前かけ。子どもが、木を見上げて、

「ああ、おら、あの赤い着物がほしいなあ」というと、風がごおっとふいて、赤い着物がひらひらひらっと落ちてきました。

「ああ、おら赤い前かけがほしいなあ」というと、また風がごおっとふいて、赤い前かけがひらひらひらっと落ちてきました。

座頭の木は、子どもがほしいというたびに、ほしいものをきりもなく落としてくれるのでした。

これきって、とっぴんぱらりのぷう

村上郁再話

資料「秋田むがしこ一」今村義孝編／無明舎出版